

WURUGA

1. 事業実施の目的

2023 年度日本モンゴル学会春大会での口頭発表

2. 実施場所

東京桜美林大学新宿キャンパス

3. 実施期日

2023 年 5 月 19 日（金）～ 2023 年 5 月 22 日（月）

4. 成果報告

●事業の概要

日本モンゴル学会は、1970 年に創立されたモンゴル研究の興隆と普及を図る総合的な学会である。同学会は、モンゴル国、中国、ロシアなどのモンゴル文化圏におけるモンゴル人の歴史、文化、社会、言語、宗教、政治、経済に関する多岐にわたるテーマについて、年に 2 回（春季、秋季）研究大会を開催している。また、年刊の学会誌『日本モンゴル学会紀要』も発刊し、海外の学術機関・研究者との学術協力および交流等の事業も積極的に行なっている。

2023 年度日本モンゴル学会春大会は、5 月 20 日に東京桜美林大学新宿キャンパスで開催され、約 80 人の研究者が集まった。本大会では 1 部の基調講演と 2 部の研究発表が行われた。研究発表では人類学、歴史学、言語学などの分野から 9 名が発表を行った。この中で、報告者が特に注目したのは高知大学の湊邦生先生の「モンゴルにおける地方移住促進の現状」という発表であった。彼は、近年のモンゴル国における、首都ウランバートルから地方への移住を促す動きに焦点を当て、モンゴル国政府が現時点で行う取り組みについて、現地からの資料を基に論じた。特に、都市から地方へ移住するという U ターン運動は、報告者の調査地である内モンゴルにおいて、人々を地方から都市へ移住させるという都市化政策と対照的であり、報告者にとって今後の比較研究を深める上で示唆的であった。

報告者は、午前中の第 1 部の研究発表において「都市に移住したモンゴル族牧畜民の日常生活に関する人類学的研究—子供の十二歳の宴会を事例に」というタイトルで口頭発表を行った。これまでの先行研究では、生態保護政策自体に関する研究のほか、生態保護政策が当該地域の人々にもたらした影響についても多く論じられてきた。特に、牧畜民を強制的に都市に移住させるのは、彼らにとって単なる生業転換や居住空間の移転だけではなく、モンゴル族としての文化、風習、言語、アイデンティティにマイナスの影響を与えていることが明らかにされてきた。しかし、これらの研究では牧畜民たちの移住後の日常生活や彼らの都市での生活実態についてそれほど触れられていない。そこで、本発表では中国の生態保護政策によって都市に移住したモンゴル族の牧畜民を対象に、彼らの都市での日常生活に

着目し、特に近年彼らの間で頻繁に行われるようになった「子供の十二歳の宴会」に焦点を当てた。そして、この宴会が流行した背景、宴会をするための準備、宴会の実施過程を紹介し、牧畜民たちにとってこの宴会がどのような意味を持っているかについて明らかにすることを試みた。

●学会発表について

本発表のタイトルは「都市に移住したモンゴル族牧畜民の日常生活に関する人類学的研究—子供の十二歳の宴会を事例に」である。発表では、まず、調査対象である牧畜民世帯の移住原因と移住後の基礎的な生活状況について簡単に説明した。その後、モンゴル族の子供に関わる儀礼を概観したうえで、現在、都市部で行われている「子供の十二歳の宴会」の様子について紹介した。ここでは、具体的な事例としてインフォーマントのS氏が息子のD君のために催した宴会を取り上げ、この宴会の準備過程から宴会当日の流れについて詳しく記述したうえで、本宴会の特徴について述べた。

結論として、都市に移住した牧畜民たちの日常生活において「子供の十二歳の宴会」は、単に子供の成長を祝う儀礼であるだけでなく、彼らの都市生活での「富」や自身の能力を表現できる一つの機会であると考えられることを提示した。また、彼らは宴会を通じて、自分たちのエスニック・アイデンティティをさまざまな場面で発露し、強調していることが分かった。さらに、宴会を催すことは、ホスト側にとって既存の社会関係を維持できるだけではなく、むしろ都市での新しい人間関係を構築するためにも不可欠なものであると結論づけた。

発表後、宴会の流行は当該地域の漢族の影響を受けているのかという質問を参加者から受けた。これに対して、この子供の宴会が、内モンゴル自治区の中部と隣接している、山西省や陝西省の漢族における「圓鎖」という子供の十二歳を祝う慣習から来たという研究があることに触れ、現在、牧畜民のなかで行われている子供の十二歳の宴会は、実は漢族の影響を受けて定着したものではないかと回答した。その他に、人類学における贈与論の視点からこの宴会を取り上げて考察したほうがよいのではないかというコメントもあった。これに関連して、例えばポトラッチと比較して、本宴会の相違点と類似点を確認できたら興味深いのではないかという貴重な助言を頂いた。

●本事業の実施によって得られた成果

本発表を通じて、参加した研究者たちから様々なアドバイスとコメントを頂き、博士論文に関わる貴重なヒントを頂くことができた。報告者は、得られた意見や助言を踏まえて、発表原稿を論文にまとめ『総研大文化科学研究』あるいは『日本モンゴル学会紀要』などに投稿し、博士論文の一つの章として活用する予定である。また、本研究大会に参加することによって、報告者は日本におけるモンゴルに関する最新の研究動向を把握することができた。これにより、本研究の具体的な位置付けをより明確にすることができ、今後の研究にとって

有意義な成果が得られた。

●本事業について

本事業の利用により、報告者は研究大会での発表という大変重要な機会を頂きました。感謝を申し上げます。非常に良い勉強と経験になりました。今後とも、このような事業が継続されることを希望します。